ソクラテスに関する「四つの難題」

第一部

ソクラテスと「デルポイの神託」

目　次

ソクラテスに関する「四つの難題」

第一部

①ソクラテスと「デルポイの神託」

一、「デルポイの神託」について

二、「デルポイの神託」以前と以後との違い

※　参考文献

「デルポイの神託」

「デルポイの神託」について

それは、ソクラテスの若い時からの友人で、何をやりだしても熱中するたちだったカイレポンという人が、それは、「……いつだったか、デルポイへ出かけていって、こういうことで神託を受けることをあえてしたのです。――それはつまり、わたしよりもだれか知恵のある者がいるかどうかということを、たずねたのです。すると、そこの巫女は、より知恵のある者はだれもいないと答えたのです。……」（『ソクラテスの弁明』）

この「巫女のお告げ」そのものには、それほどの意味はないだろう。大事なのは、むしろソクラテス自身がそれをどのように受けとめたのか？　その「受けとめ方」にこそ、それ以前とそれ以後とのソクラテスの人生を大きく変えてしまう、まさに「決定的な要因」があるわけである。

友人（ｶｲﾚﾎﾟﾝ）から聞く。

それを聞いて、ソクラテスは、「……いまの神託のことを聞いてから、わたしは、心にこういうふうに考えたのです。いったい何を、神は言おうとしているのだろうか。いったい何の謎をかけているのだろうか。なぜなら、わたしは自分が、大にも小にも、知恵のある者なんかではないのだと自覚しているのだから。すると、そのわたしをいちばん知恵があると宣言することによって、いったい何を神は言おうとしているのだろうか。というのは、まさか嘘を言うはずはないからだ。神にあっては、それはあるまじきことであるからだ」と、受け止めます。そして、ソクラテスは、その神託の「真意（謎かけ）」をぜひとも解明しなければならないと考えるわけである。

そして、長いあいだ、いったい何を神は言おうとしているのであろうと、わたしは思い迷っていたのです。そして、まったくやっとのことで、その意味を、次のような仕方で、たずねてみることにしたのです。

それは、だれか知恵があると思われている者の一人を訪ねることだったのです。ほかはともかく、そこへ行けば、神託を反駁して、ほら、この者のほうがわたしよりも知恵があるのです。それだのにあなたは、わたしを知者だと言われた。というふうに、託宣に向かってはっきりと言うことができるだろうというわけなのです。

ところがその人物――というだけで、とくに名前をあげる必要はないでしょう。それは政界の人だったのですが、その人物を相手に問答しながら子細に観察しているうちに、アテナイ人諸君よ、わたしは次のようなことを経験したのです。つまり、この人は他の多くの人たちに知恵のある人物だと思われているらしく、また、とくに自分自身でもそう思いこんでいるらしいけれども、じつはそうではないのだとわたしには思われるようになったのです。そしてそうなったとき、わたしは、彼に、君は知恵があると思っているけれどもそうではないのだと、はっきりわからせてやろうとつとめたのです。するとその結果、わたしは、その男にも、そして、その場にいた多くの者にも、憎まれることになったのです。

ここで、いつも問題になるのは、ソクラテスは、なぜ、相手が「知恵のある人ではない」とわかった時点でやめずに、あえてその無知を「はっきりとわからせてやろうとつとめた」のだろうか？　これは、確かに余計なことになるだろう。しかし、相手と直接「対話（議論）活動」を行なうという行為は、お互いの考えを「一問一答の形式」で一つ一つ確かめながら前に進んでいくものである。しかも、自分だけわかっていても仕方がないので、相手にもはっきりとわからせるためにも、相手の考えのどこがどのようにおかしいのかを、はっきりと言葉に出して説明していかなければならない。そのようにしてお互いの考えの矛盾点やおかしな点などをお互いに厳密に「吟味・検討」し合いながら、その「対話（議論）」を次から次へと展開させて論点を深めていくわけだから、相手が「知恵のある人ではない」とはっきりとわかるところまで「対話（議論）」を重ねていく過程は、そのまま相手の無知を言葉に出して暴露していくような過程にならざるを得ないものである。

しかも、ソクラテスにしてみれば、相手の人が自分より間違いなく知恵があるという、自他ともに認めるようなまったく揺るぎのない「確証」が得たいわけであるから、どうしてもその「対話（議論）」というものは、適当なところで妥協をして、もうこの辺でいいだろうという中途半端なところでやめるわけにもいかず、相手の論や考えに矛盾やおかしなところがあれば、そこを徹底的について、お互い納得がいくところまでとことんつっ込んだ「対話（議論）」を行なうような形にならざるを得ないものである、それは、相手の「無知」を言葉に出して露骨に暴露していくような感じにもなってしまうものである。しかも、相手は、多くの人たちから知恵があると思われ、また、社会的な地位も負けん気も強い政治家であれば、政治家としての「面目」にかけても、自分の論や考えの矛盾や無知などを容易に認めようとはせずに、執拗に反論してくるだろうから、ソクラテスとしても、とことん相手の「無知」（その場合、政治に関する知識などがあるかどうかではなく、むしろ人間の諸問題に関する大事なことがら《つまり「善美のことがら」》をしっかりと知っているかどうかの厳密な吟味に耐えられないのに、つまり、ほんとうは知らないのに、知っていると思い込んでいる無知）を暴露していくような形にならざるを得ないだろう。

そして、その「対話（議論）」に負けた人は、非常に気分が悪い。何か自分の「全人格」を頭から否定されたような耐えがたい敗北感と屈辱感を味わわされるものである。その結果、議論した相手を心の底から憎むような気持ちになったとしても、ある程度は仕方のないことかも知れない。もちろん、ソクラテスにしてみれば、そのようなことが目的ではなく、神託に反駁するためには、自分よりも知恵のある人を捜し出さなければならない。そして、いかにも知恵のありそうな人を見つけ出したならば、今度は、その人が間違いなく「知恵のある人」であるかどうか、あらゆる角度から徹底的に「吟味・検討」してみなければならない。そして、そのような厳密な「吟味・検討」を徹底的に行なうということは、取りも直さず、相手の「無知」を露骨に暴露するような結果になってしまうのは、むしろ当然のことである。それゆえ、もうその最初の段階から、相手の「無知」を暴露し、それを相手にはっきりとわからせるような（つまり自覚させる）ような行為（行動）になってしまったのは、なり行き上、むしろ仕方のなかったことである。しかし、そのようなことは、同時に、ソクラテスへの「逆恨み（憎しみ）」になってしまったというのも、ある程度は仕方のないことかも知れない。（なぜなら、われわれ人間というのは、自分の欠点や

弱点などを他人からはっきりと指摘されることが何よりもきらいだからである。）

そして、わたしは、彼と別れて帰る途(みち)で、自分を相手にこう考えたのです。

この人間より、わたしは知恵がある。なぜなら、この男も、わたしも、おそらく善美のことがらは何も知らないらしいけれど、この男は、知らないのに何か知っているように思っているが、わたしは、知らないから、そのとおりにまた、知らないと思っている。だから、つまり、このちょっとしたことで、わたしのほうが知恵があることになるらしい。つまり、わたしは、知らないことは知らないと思う。ただそれだけのことで、まさっているらしいのです。(21d)

これが、有名な「無知の知」（或いは「無知の自覚」）というものである。ただ、ここで最も大事なことは、むしろ「善美のことがら」という言葉であり、この言葉を軽く読み流してはいけない。なぜなら、ソクラテスは、人間にとって最も大事な問題とは、すなわち、「善美のことがら」（一般には「徳」《正義、勇気、節制、知恵、その他》のこと）ではあるが、その「徳」のなかでも《より根源的な「善美の問題」》こそは、最も大事な問題である、と、はっきりと明言していることになるからである。そして、その師ソクラテスの遺志（精神）を真に受け継いで、人間にとって最も大事な問題である、その「善美の問題」を全精力を傾けて根源から解明しようと試みたものが、まさにプラトンの、あのあまりにも有名な「美のイデア」と「善のイデア」であり、それこそ、まさにプラトン哲学の「最高峰」とも呼ばれているものである。

さて、ソクラテスは、政治家をはじめ、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ人たち（手工者）、その他、いろいろな人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていくことになるが、その「遍歴」については、つぎのように語っている。

それで、それ以降、今日まで、つぎからつぎへと歩いてみたのです。自分が憎まれているというのはわかっていたし、それが苦にもなり心配にもなったのですが、しかしそれでも、やはり、神のことはいちばん大切にしなければならないと思えたのです。ですから、神託の意味をたずねて、およそ何か知っていると思われる人があれば、だれのところへでも、すべて行かなければならないと思ったのです。（中略）

まあ、とにかく、わたしのその遍歴というものを、諸君のお目にかけなければならない。それは、まるでヘラクレスの難行みたいなものですが、結局は、神託に言われていたことが、わたしにとっては、否定できないものなのだということになるのです。

そして、ソクラテスは、次のような結論を出すことになる。

つまり、こういう詮索をしたことから、アテナイ諸君、たくさんの敵意がわたしに向けられることになってしまったのです。しかもそれは、いかにも厄介至極な、このうえなく耐えがたいものなのでして、多くの中傷もここから生じる結果となったのです。しかし名

前は、知者だというように言われるのです。なぜなら、どのばあいにおいても、わたしが他の者を何かのことでやりこめたりすると、そのことについてはわたし自身は知恵をもっているのだと、その場にいる人たちは考えるからなのです。

しかし、じっさいは、諸君よ、おそらく、神だけがほんとうの知者なのかもしれないのです。そして、人間の知恵というようなものは、なにかもう、まるで価値のないものだと、神はこの神託のなかで言おうとしているのかもしれません。そしてそれは、ここにいるこのソクラテスのことを言っているように見えますが、わたしの名前はつけたしに用いているだけのようです。つまり、わたしを一例にとって、人間たちよ、おまえたちのうちでいちばん知恵のある者というのは、だれであれ、ソクラテスのように、自分は知恵に対してはじっさい何の値打ちもないのだということを知った者が、それなのだと、言おうとしているもののようなのです。

このソクラテスの結論そのものには、それほど大きな意味はないだろう。なぜなら、そのような結論（つまり己の無知を知ることや人間の知恵などはたかが知れているということ、そして、神だけが真の知者であるということなど）は、ソクラテス自身にとっては、最初からわかりきっていたことであり、それを再確認しただけに過ぎないからである。それゆえ、それだけでは、ソクラテスの人生を大きく変える「劇的な事件」とはなり得なかっただろう。なぜなら、「デルポイの神託（お告げ）」の意味がそういうものだけであれば、その意味がわかった時点で、もうわざわざ次から次へと「知者」を捜しまわる必要もなければ、また、その人と「対話（吟味）活動」などを行なって、若しもその人が「知者」でもないならば、そのことを相手にはっきりと自覚させるというような余計なことをして、その人たちから嫌われたり、憎まれたりするようなことは、さっさとやめることもできただろう。また、知を愛し求める仲間やその他の人たちと親しく「対話（議論）活動」を行なっているほうが、よほど楽しかったに違いない。それでは、一体、ソクラテスの「心の中」でどのようなことが起こったから、人に嫌われ、憎まれてまで、そのようなことを死ぬまで積極的にやり続けたのだろうか？

それは、次のような「内的事件」が、ソクラテス自身の「心の中」ではっきりと起こったからに違いない。

つまり、ソクラテスも最初は自分より知恵のある人をさがし出しては、ほら、この人のほうが自分よりも知恵を持っているじゃないかと、神託に反駁することを目的として、わざわざ知者と思われる人たちのところまで出かけて行って、あれこれ対話をしてみるわけである。しかし、いろいろな分野の知者と思われる人たちとあれこれ対話をしていくうちに、どうも自分のほうが、知らないことは知らないとはっきりと自覚している分だけ、世の知者たちよりは、少しばかり知恵があるのかも知れないと思うようになるわけである。そして、そのような意味からも、どうも「デルポイの神託（お告げ）」は、うそではなかったという結論にならざるを得ないと思いながらも、それでは、神は、なぜ「ソクラテスより知恵のある者はいない」などというお告げを、わざわざ友人を介して、私に知らせてくるようなことをしたのだろうかと、あれこれ考えているうちに、ソクラテスは、「ああ、

そうか！」と、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、ある「想い」に襲われることになるわけである。それは、まるで「重苦しく覆(おお)っていた心の暗雲が一瞬にして晴れるがごとく、あるいは、その暗雲のその奥からまさに眩いばかりの〈光〉が差し込む」がごとく、ある日、ある時、ソクラテスの脳裏に「天雷」のごとくどこからともなく突然として襲いかかってきたに違いない。

――「ああ、そうか！」、こうやって、毎日、誰か知恵があると思われる人がいれば、もう老若男女を問わず、また、どのような分野のどのような人であれ、その人と親しく「対話（吟味）活動」を積極的に行なっては、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」（つまり人間にとって最も大事なことがらを熟知している人）でもないのに、何か「知者」（つまり人間にとって最も大事なことがらを熟知している人）であるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと、相手にはっきりと自覚させるような「行為（行動）」、そのような「行為（行動）」は、例の「デルポイの神託（お告げ）」以降、自分よりも知恵のある人を見つけ出しては、いわゆる「神託に反駁したい」一心から、ずっと行なってきたわけだが、しかし、今から思えば、まさにそのような「行為（行動）」をさせるためにこそ、「神」はわざわざあのような「謎かけ」を「私」にしてきたに違いないと解釈するわけである。この時、ソクラテスは、はっきりと神の「謎かけ」の真意を理解したことになるわけである。――すなわち、これからの人生で自分がこの世でやらなければならないことは、どのような分野のどのような人であるを問わず、必要があれば、どこの誰とでも積極的に「対話（吟味）活動」を行ない、そして、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと、相手にはっきりと自覚させるようなことこそは、すなわち、「神からの絶対的な命令」であると考えるようになるわけである。――「……それは、神託によっても伝えられたし、夢知らせによっても伝えられたのです。また、ほかに、神の決定で、人間に対して、まあ何であれ、何かをなすことが命じられるばあいの、あらゆる伝達の方法がとられた」わけであるが、しかし、やはり「デルポイの信託（お告げ）」こそは、最も決定的なものとなったことに間違いはないだろう。なぜなら、もし、あの「デルポイの神託（謎かけ）」がなかったならば、わざわざ政治家を初めとして、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手工者たち、その他、そのような一般に「知者」と思われている人たちのところまで出かけて行って、その人と「対話（吟味）活動」を行ない、そして、その相手の人が真に「知者」であるかどうかを厳密に「吟味・検討」するというような、そういう余計な「行動（活動）」をする必要などどこにもなかったからである。

それ以後、ソクラテスは、上述のような「使命感」をはっきりと持って、

だから、これがつまり、わたしがいまだにそこらを歩きまわって、この町の者であれ、よその者であれ、だれか知恵のある者だと思えば、神の指図にしたがってこれを探し、しらべあげているわけなのです。そして知恵があるとは思えないばあいには、神の手助けをして、知者ではないぞということを明らかにしているわけなのです。そしてこの仕事が忙しいために、公私いずれのことも、これぞというほどのことをおこなう暇(いとま)がなく、ひど

い貧乏をしているのですが、これも神に仕えるためだったのです。

では、「神託」以前とそれ以後とでは、いったい何がどう大きく変わったというのだろうか？　この問題を、もう一度、再確認しておきたいと思う。まず、「神託」以前のソクラテスの行動範囲であるが、恐らく、「神託」以前のソクラテスは、知を愛し求めるような人たちを中心として、いろいろな問題について哲学的な「対話（議論）活動」を楽しんでいたのだろう。つまり、気の合った仲間や同じような志向（愛知心）を持つ人たち、また、街頭に出て、そこで興味や関心を持った若者や人物などを相手に好んで「対話（議論）活動」を行なうような、そういうある程度限られた範囲での活動が中心ではなかっただろうか。つまり、「神託」以後のように、何らかの「知恵を持つ」と思われる人であれば、もうどのような分野のどのような人であれ、また、老若男女を問わず、もう誰であろうと手あたり次第に次から次へと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていくような状態とは、少し違っていたのではないだろうか。むろん、「デルポイの神託」以前から、街頭に出て、若い人たちをはじめ、いろいろな人たちと好んで「対話（吟味）活動」を行ない、相手を吟味するようなことも当然行なっていただろうし、また、それを自分の仕事なり使命なりとも思っていたかも知れない。しかし、それをもう全く揺るぎのない「神からの絶対的な命令」とまでは考えてはいなかったのではないだろうか。

ところが、「神託」以後（特に神託の真意が分かった以後）は、神からの絶対的な命令という極めてはっきりとした「使命感」を持って、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行って、そして、もし相手の人が何らかの「知恵を持っている人」だと思えば、もう老若男女を問わず、また、どのような分野のどのような人であれ、また、たとえその相手が苦手な相手であっても、また、こんなことを言えば相手から憎まれるだろうと思っても、積極的にいろいろと「対話（吟味）活動」を行なっては、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が知者でもないのに、何か知者のように思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させるようなことを、毎日の日課のようにするわけである。（つまり、ソクラテスの「対話相手」が無限《かつ無制限》に拡大されたということが一つと、もう一つは、その「使命感の強さ」がさらに強固に、全く揺るぎのないものになって行ったということが、以前とは違って来るわけである。）

それでは、相手の「無知」を自覚させるとは、一体、どういうことなのか？　もちろん、それは、相手が知者でもないのに、知者だと思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させることではあるが、しかし、それをもっと拡大してみると、例えば、正しくもない行為をなにか正しい行為だと思い込んでいる無知、また、まだ何者でもないのに、すでにもうひとかどの人間であるかのように思い込んでいる無知、また、ほんとうに大事なもの（や大切なもの）を粗末にあつかい、そして、取るに足りないものを何か価値あるものや優れたものだと思い込んでいる無知、その他、そういう様々な「無知」（＝思い違い）をしているようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させるようなことも含まれているわけである。そして、それらの「無知」は、すべて物事を深く考えて、より厳密に「真偽」を見極めるということができていないからであり、また、物事をより厳密かつより正しく「判断し、評価する」ことができていないために生じるも

のである。それゆえ、何よりも自分の「魂」（精神）をできるだけ真に優れたものにすることによってこそ、それらの様々な「無知」からは解放されることになるわけである。

＊　＊

ところで、ソクラテスは、なぜ、あれほどまでにいろいろな人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を飽きもせず死ぬまで好んで行なったのだろうか？　それはもちろん、それが、まさに「神からの絶対的な命令」（つまり「天命」）であると固く信じていたからであろうが、それと同時に、より「根源的な理由」としては、それこそは、まさに「知を愛し求めてやまぬという心」からということになるのだろう。そして、それはもう本人すら如何とも止めようのないものだったに違いない。

むろん、それは、もう若い時（少年の頃）からずっと続いていたであろうが、しかし、若い時の「知を愛し求めてやまぬ心」とは、何よりもその人の知的好奇心を満たすためと、もう一つは、自分自身を育て上げるためのものであり、そのほとんどが「自分のため」のものである。そして、若い時期というのは、ほとんど例外なく、もう誰でも実に様々なものに「興味や関心」を示す時期であり、それゆえ、ソクラテスも、若い時には、ホメロスの叙事詩をはじめ、様々な悲喜劇、当時の有名なソフィストたち、また、いろいろな自然哲学、その他、実に様々なものに「興味や関心」を持って、恐らく、十代、二〇代は、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を行なって過ごしていたに違いない。そうでなければ、どうして後年のソクラテスが存在でき得ただろうか。もちろん、それは、ソクラテスだけの問題ではなく、すべての人間において、十代、二〇代をどのように過ごすかは、極めて大きな問題であり、この時期に極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることによってこそ、物事を極めて厳密に考え深めていくという真の「思考（思索）能力」をしっかりと身につけることが可能になるということである。そして、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることによってこそ、ソクラテスの「内的世界」もどんどん「内的成長」していくことになり、やがて、いろいろな人たちから一目おかれるような存在になって行ったということである。それが、恐らく、「三〇歳前後」ぐらいではなかっただろうか。

それはともかく、後年のソクラテスは、実にいろいろな分野のどのような人たちであれ、また、老若男女を問わず、必要があると思えれば、その一人一人の人と親しく「対話（吟味）活動」を行ない、いわゆる「無知の状態」（様々な「思い違い」）のところでとかく眠りがちな意識を、はっきりと目覚めさせるようなことを、毎日の日課のようにしていたわけである。つまり、「……彼は、絶えず家の外で暮らした。早朝から遊歩路（ペリパトス）や道場（ギュムナシオン）へ出かけて行き、市場の出盛る午前中は市場におり、それからあとは一日中、いつも大勢の人間が寄り集るところへ来ていた。そして大抵は議論しており、誰でも彼の話を聞けたのである。……」（ソクラテスの思い出、第一巻、10～11）

そして、長い間、ソクラテスは、毎日のように、朝早くから遊歩道や体育場、また、広場（市場）や街頭、その他、そのようなところを歩きまわっては、いろいろな人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていたわけだが、その姿というものは、多くのアテナイ人たちにとっては、かなり奇妙で変わった人間として見られていたに違いない。しかし、ソクラテスがそのような行動をしていたのは、実は「人々の無知を自覚させろという神からの絶対的な命令」（つまり「天命」）を受けていたからだということを、例の裁判の場で、初めて多くのアテナイ人たちは知らさせることになるわけだ。もちろん、そんな

ことを聞かされても、ほとんどのアテナイ人たちにとっては、何のことだかその真意はわからなかっただろう。しかし、ソクラテス自身にとっては、「……わたしは、なんのことはない、すこし滑稽（こっけい）な言い方になるけれども、神によってこの国都（ポリス）に付着させられている者なのです。それはちょうど、ここに一匹の馬がいるとして、これは素性（すじょう）のよい大きな馬なのですが、大きいためにかえってふつうより鈍（にぶ）いところがあり、目をさましているのには、なにか虻（あぶ）のようなものが必要だという、そういうばあいにあたるのです。つまり神は、わたしをちょうどその虻のようなものとしてこの国都（ポリス）に付着させたのではないかと、わたしには思われるのです。つまりわたしは、あなた方を目ざめさせるのに、各人一人一人に、どこへでもついていって、膝をまじえて、まる一日、説得したり、非難したりすることを、すこしもやめない者なのです。……」と、自らをそう考えていたわけである。

そして、「……わたしが歩きまわっておこなっていることはといえば、ただ、つぎのことだけなのです。諸君のうちの若い人にも、年寄りの人にも、だれにでも、魂ができるだけすぐれたものになるよう、ずいぶん気をつかうべきである……」と。なぜなら、われわれ人間を不幸にしているのは、正しくもないことをなにか正しいことだと思い込んだり、また、いちばん大事なものをいちばん粗末にあつかい、どうでもよいようなものを不相応に高く評価したり、その他、そういう実に様々な「無知」（つまり「間違った判断、評価、認識、また、間違った価値観や人生観、その他」など）から生じてくることが多く、それらの実に様々な「無知」から解放されるためにも、自分自身の「魂」をできるだけすぐれた思慮あるものにすべきであるというのが、ソクラテスの最も基本的な「考え方」になるということである。

そして、

ソクラテスは、死ぬまで（つまり、毒杯を仰いで意識が薄れていくその瞬間まで）、いろいろな人たちと人間の諸問題について、親しくかつ真剣に「対話（吟味）活動」をし続けることになるわけである。それはもちろん、「知を愛し求めてやまぬ」というソクラテスという人間の、一生涯を通しての「魂そのもの」からの絶えざる欲求であったからであろうが、それに加えて、自分と対話相手の「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させるような活動こそは、そのまま「神からの絶対的な命令」（つまり「天命」）であると固く信じていたからでもあるのだろう。

＊　　＊

「デルポイの神託」以前と以後の違い

「デルポイの神託」以前と以後の違いについて

さて、「デルポイの神託」以前と以後とでは、ソクラテス自身の「行動範囲」がはっきりと変わったということが、なぜ、そうはっきりと言えるのか？　この「問題」について、もう少し丁寧に考えてみたいと思う。

まず、ソクラテスは、その『弁明』のなかで新しい訴えと古くからの訴えとを区別し、そして、古くからの訴えから弁明を始めることになるわけである。それでは、その古くからの訴えとは、いったいどういうものかと言えば、それは、「……ソクラテスというやつがいるけれども、これは空中のことを思案したり、地下のいっさいをしらべあげたり、弱い議論を強弁したりする、一種妙な知恵をもっているやつなのだ……」とか、また、裁判に訴えられた理由の一つも、「……ソクラテスは犯罪者である。彼は天上地下のことを探求し、弱論を強弁するなど、いらざるふるまいをなし、かつ、この同じことを他人にも教えている。……」というようなものである。もちろん、ソクラテス自身は、そんなことはしていないと、はっきりと否定したあと、次のように話を進めていくわけである。

「……そうすると、だれか、あなた方のうちで、たぶん、すぐに、こうたずねる人があるでしょう。しかし、ソクラテス、君の仕事は何なのか？　どこから、君に対する、こういう中傷が生まれてきたのだ？　なぜなら、君という人が、ほかの人のしない、よけいなことは、何もことさらにしていないのに、それなのに、こういう噂や評判がたつはずは、きっとたぶん、なかっただろう。（中略）、だから、どうか、君のしていることが何なのか、われわれに言ってくれたまえ。（中略）、――こう言う人があるなら、わたしはそれを、もっともな言い分であると思う。だからわたしも、いったい何がわたしに、こういう名前をもたらし、こういう中傷を受けるようにしたのかを、諸君にはっきりとわかるようにしてみましょう。……」（20c ～ d）

ここで、最も大事な文章は、すなわち、「……いったい何がわたしに、こういう名前（つまり知者という名前）をもたらし、こういう中傷を受けるようにしたのかを、諸君にはっきりとわかるようにしてみましょう」という箇所である。それでは、なぜ、この箇所が最も大事になるのかと言えば、それは、この箇所を説明するためにこそ、ソクラテスは、例の、いわゆる「デルポイの神託」の話を持ち出すことになるからである。

つまり、例の「デルポイの神託」の話というのは、一つは、「わたしの知恵について、それがまたどういう種類のものであるか」を説明するためと、もう一つは、「わたしに対する中傷が、いったいどこから生じたのか」、その起源を説明するためのものだったわけである。それは、一体、どういうことを意味するのかと言えば、それは、つまり、「わたしに、知者という名前をもたらしたのも、また、わたしに対する中傷が生じるようになったのも、まさに例の『デルポイの神託』にその起源があるのだ」ということを、はっきりと公言していることになるわけである。逆に言えば、「デルポイの神託」以前は、まだソクラテスは、広くアテナイの人たちから「知者」とは思われていなかったし、また、それほどの「中傷」も受けてはいなかったことになるかと思う。（もちろん、友だちや仲間たちの間では、ソクラテスは、すでに「知者」としてよく知られていただろうが……。）

つまり、ソクラテスは、「デルポイの神託」以後、自分よりも「知恵のある人」をたずねて、政治家を初めとして、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手工者たち、その他、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行ない、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させるような活動をしたために、それを見ていた多くの人たちから、ソクラテスという人物は、いわゆる「知者」であるという噂や評判が立つようになったと同時に、もう一方では、その対話相手の「無知」をはっきりと暴露し、それを自覚させるようなことをしたために、その対話相手やその仲間たちから非常に嫌われ、憎まれるような結果になってしまったわけである。（つまり、この二つのものは、ほとんど同時に進行して行ったということである。このことも決して忘れてはならない重要な要点（ポイント）なのである。）

このことについて、ソクラテス自身は、次のように語っている。

つまり、こういう詮索をしたことから、アテナイ人諸君、たくさんの敵意がわたしに向けられることになってしまったのです。しかもそれは、いかにも厄介至極な、このうえなく耐えがたいものなのでして、多くの中傷もここから生じる結果となったのです。しかし名前は、知者だというように言われるのです。なぜならば、どのようなばあいにおいても、わたしが他の者を何かのことでやりこめたりすると、そのことについてはわたし自身は知恵をもっているのだと、その場にいる人たちは考えるからなのです。」（23a）

つまり、ソクラテスという人は、あの例の「デルポイの神託」以前は、それほどの「中傷」はまだ受けてはいなかったことになる。そして、耐え難いほどの「中傷」を受けるようになるのは、まさに「デルポイの神託」以降であり、それは、政治家をはじめ、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手工者たち、その他、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっては、相手の「無知」を暴露し、それを相手に自覚させるようなことをしたからであろう。だとすれば、それ以前は、そのようなこと、つまり、ソクラテスは、若い頃からいろいろな人たちと好んで「対話（議論）活動」を活発に行なっていただろうが、しかし、それは、あくまでも人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究にこそ、重点が置かれ、いわゆる「デルポイの神託」以後のように、相手の「無知」を暴露し、それを相手にはっきりと自覚させるようなことは、あまり（或いは徹底的には）まだ行なっていなかったことになるのだろう。つまり、いわゆる「デルポイの神託」以前のソクラテスは、気心の知れている仲間（友人）たちを初めとして、いろいろな人たちと親しく「対話（議論）活動」を行なっていただろうが、しかし、それは、いわゆる「デルポイの神託」以後のように、無限（かつ無制限）に拡大されたものではなかったとともに、その「対話（議論）活動」の目的も、あくまでも人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究にこそ、その重点が置かれ、相手の「無知」を暴露し、それを相手にはっきりと自覚させるようなことは、あまり（或いは徹底的には）まだ行なっていなかったことになるのだろう。だからこそ、それほどの「中傷」を受けることもなかったわけである。もちろ

ん、全くなかったわけではないだろうが、それほど大したものではなかったのだろう。ところが、「神託」以後は、何らかの「知識を持つ」と思われる人であれば、もうどのような分野のどのような人であれ、もう手あたり次第に、つまり、無限（かつ無制限）に次から次へと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうようになるわけだが、それは、いわゆる人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究のためだけではなく、それと同時に、もう一つの目的（それは、「デルポイの神託」のもう一つの隠された真意）でもある、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと、相手にはっきりと自覚させるようなことをしていたので、その対話相手やその仲間の人たちから、実に様々な「中傷」を受けるようになったわけである。

つまり、「デルポイの神託」以前と、それ以後では、明らかに「その行動範囲とその目的」がはっきりと違って来ることは、全く疑いようがないわけである。つまり、「神託」以前は、ある程度、限られた人たちと「対話（吟味）活動」を行なっていたということである。それは、まず気心の知れている仲間（友人）たちを初めとして、それ以外に興味や関心を持った人たち（もちろん、その中には知識人もいれば、若者たち、その他の人たちも数多くいただろう）が、大体、そういう人たちを中心として親しく「対話（議論）活動」を行なっては、いわゆる人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究を行なっていたのだろう。しかし、もう一方の相手の「無知」を暴露し、それを相手にはっきりと自覚させるようなことは、あまり（或いは徹底的には）まだ行なっていなかったのだろう。だからこそ、それほどの「中傷」を受けることもなかったわけである。

ところが、「神託」以後は、その対話相手が無限（かつ無制限）に拡大されることになるとともに、いわゆる人間の諸問題の徹底的な「真実・真理」の探究だけではなく、それと同時に、相手の「無知」を暴露し、それを相手にはっきりと自覚させるようなことが、もう一つ付け加わって来るわけである。つまり、何らかの「知恵を持つ」と思われる人であれば、もうどのような分野のどのような人であるを問わず、積極的に「対話（吟味）活動」を行なうようになるわけである。そして、「神託の真意」がはっきりとわかった時点からは、さらに朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行っては、そこでいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっては、お互いの「知の状態」をできるだけ徹底的に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手にはっきりと自覚させるようなことを、いわば毎日の「日課」のようにするわけである。もちろん、それは、ソクラテス自身そうすることが、「神からの絶対的な命令」であると固く信じていたからであるとともに、「知を愛し求めてやまぬ心（魂）そのもの」が、まさにソクラテスをしてそのような活動を長年にわたってさせるようになって行くのだろう。

そのことについては、ソクラテス自身、次のように話をしている。

ところで、わたしがまさに、神によってこの国都（ポリス）に与えられたような者であるということについては、つぎのようなところから、諸君のご理解が得られるかもしれない。すなわ

ち、わたしは、すでに多年にわたって、自分自身のことはいっさいかえりみることもせず、自分の家のこともそのままかまわずに、いつも諸君のことをしていたということは、それも、私交のかたちで、あたかも父や兄のように、一人一人に接触して、魂（いのち）を立派にすることに留意せよと説いてきたということは、人間だけの分別や力でできることとは見えないからです。」（31aｮ）

もちろん、これは、ソクラテスの「哲学遍歴」（つまり「哲学の実践」）のことをいっているわけだが、ここで最も大事なことは、つまり、「……わたしは、すでに多年にわたって、自分自身のことはいっさいかえりみることもせず、自分の家のこともそのままかまわずに、いつも諸君のことをしていたという……」ところである。つまり、ソクラテスの「哲学遍歴」（つまり、毎日、街頭に出て、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話《吟味》活動」を行なっては、相手の「無知」を自覚させるようなこと）は、一体、いつ頃から始まったのかと言えば、それは、もちろん、例の「デルポイの神託」以降である。それでは、その「デルポイの神託」とは、いったいソクラテスが何歳の時だったのか、という問題が、新たに大きく浮かび上がって来ることになるかと思う。

それは、一般的には「三十五歳前後」（或いは「四十代の前半ぐらい」）ではないかと考えられているものである。もし、そうだとすれば、ソクラテスは、非常に早くから「神からの絶対的な命令」という極めてはっきりとした使命感を持って、その後、約三〇～三十五年間ぐらい、街頭に出て、いろいろな人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていたことになるということである。

例えば、これは、まったく個人的な意見になるが、恐らく、十代、二〇代の若い時期に、極めて旺盛な「知的遍歴」を積み重ねた若いソクラテスは、やがて三〇歳前後ぐらいになると、若いソクラテスの「内的世界」もほぼでき上がってきていただろう。そして、その頃から、後年のソクラテスらしい「対話（吟味）活動」が出てきて、それゆえ、ソクラテスと親しく「対話（議論）」を行なうような人たちは、ソクラテスという人物に対して、それなりに一目おくようになって来ていたのだろう。もちろん、友人や仲間たちの間では、すでに誰よりもずば抜けて優れていたに違いなく、それでは、どのくらい優れているのかと思って、わざわざデルポイの「アポロン神殿」まで聞きに行ったのではないだろうか。つまり、めきめきとその頭角を現わして来たまだ若いソクラテスに対して、カイレポンは、非常に驚嘆して、それゆえ、わざわざデルポイまで出かけて行って、「ソクラテスよりも誰か知恵のある者がいるかどうか」ということをたずねたのだろう。つまり、そのような行動をするのは、その人がまだ若い時期であることが多く、それゆえ、カレイポン自身がまだ若い時期のころの話ではないかと思う。

そして、「ソクラテスよりも誰か知恵のある者がいるかどうか」という問いかけをしたということは、少なくともカイレポン自身は、ソクラテスこそは、誰よりも優れた「知者」に違いないと思い込んでいたのだろう。そうでなければ、「ソクラテスよりも誰か知恵のある者がいるか」などという問いかけをするはずがない。つまり、カレイポンは、ソクラテスこそは、誰よりも優れた「知者」に違いないと思い込んでいて、それを「確かめる」ために、わざわざデルポイまで出かけて行って、たずねたことになるのだろう。

そして、ソクラテスは、その「デルポイの神託」の話を聞いてから、なぜ、そのような

「謎かけ」をして来たのか、「長いあいだ、思い迷う」ことになるわけだ。それでは、その「長いあいだ」とは、一体、どのくらいの期間なのか？　例えば、一、二週間ぐらいなのか？　それとも一か月ぐらいなのか？　あるいは三か月ぐらいかかったのか？　もちろん、その答えは、まったくわからない。ただ推測するに、早ければ、一、二週間、意外に一か月ぐらいの歳月が流れたのかも知れない。というのも、ソクラテス自身、「……長いあいだ、いったい何を神は言おうとしているのであろうかと、わたしは思い迷っていたのです。そして、まったくやっとのことで、その意味を、つぎのような仕方で、たずねてみることにしたのです。……」という言葉の感じと、もう一つは、「……ぼくという人間は、自分でよく考えてみて、結論として、これが最上だということが明らかになったものでなければ、ぼくのうちの他の［感情や欲望などの］いかなるものにも従わないような人間なのであって、これは今に始まったことではなくて、いつもそうなのだ。……」（『クリトン』46b）という性格からの推測である。

次に、自分よりも「知恵のある人」をたずねて、政治家をはじめ、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ人たち、その他、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行ない、そして、相手の「無知」を暴露するようになるわけだが、やがて、その「神託のもう一つの真意」がはっきりと分かるようになるまでには、どのくらいの歳月が流れたのだろうか？　それもまったくわからない。ただ思うに、たずね歩いた期間をも含めて、早ければ、一、二か月、遅くても三か月ぐらいではないかと思う。というのも、最初の政治家との「対話（吟味）活動」の段階から、すでに相手の「無知」を暴露するような行動になっているとともに、次の作家との「対話（吟味）活動」の時にも、すぐにでも相手の「無知」を見抜いているのを見ると、それほど多くの時間はかかっていないのではないかと思う。そして、今度は「神からの絶対的な命令」という極めてはっきりとした使命感を持って、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行っては、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうことを、いわば毎日の日課のようにするわけである。（もちろん、どのくらいの時間がかかったかはあくまでも憶測であり、それゆえ、これという確証はどこにもないわけである。）

ただ、プラトンの『カルミデス』という著作のなかで、ポテイダイアの陣地から帰ったばかりの三十七歳のソクラテスは、早々に相撲場（すもうば）に出かけて行き、そこで十五歳のカルミデスという若者に出逢うが、その若者の言葉に、「……なにしろ、わたしと同じ年ごろのものたちは寄るとさわると、あなたのうわさでもちきりですし、それに、よく覚えています。まだ子供でしたが、あなたがこのクリティアスといっしょにおられるところを、お見かけしたことがありますから。……」（156A）という言葉を信じるならば、三十七歳のソクラテスは、すでに若者たちの「話題の中心」になっていたということになるわけである。だとすれば、遅くとも「三十五歳前後」にはすでにソクラテスは街頭に出て、いろいろな人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていたことになるかと思う。（そして、若い人たちの間で話題になっていたものは、ソクラテスの日頃の言動や戦場での活躍、その他、そういういろいろなものが含まれていたことになるのだろう。）

＊　＊

「参考文献」

※底本「世界の名著プラトンⅠ」（「中央公論社」）